

## 社会

チャン ヘヨン  
張 惠英 (立命館大学)キム ドンチュン  
金 東 椿 著

『これは記憶との戦争だー朝鮮戦争と虐殺、その真実を求めて』(四季、2013年)

김동춘 『이것은 기억과의 전쟁이다- 한국전쟁과 학살, 그 진실을 찾아서』(사계절, 2013년)

日本による韓国の植民地支配の歴史と記憶をめぐる問題は、いまなお日韓関係に大きな影を落としている。朴裕河による『帝国の慰安婦』が日韓両国で刊行され、その内容に対して韓国で訴訟が起こったことも記憶に新しい。植民地支配に対する抵抗イメージは、韓国にとってまさに国家のアイデンティティとなる物語であり、そこから逸脱する要素を徹底して排除することによって公的な記憶が形成されてきた。金東椿教授の『これは記憶との戦争だー朝鮮戦争と虐殺、その真実を求めて』(以下『これは記憶との戦争だ』と表記)は、そのような公的な記憶の実態に迫っている。

本書のユニークな点は、当事者として著者自身が「記憶との戦争」に関わってきたという事実だ。「これは学術書でも、単純な回顧録でもない。2000年以降に展開した朝鮮戦争期虐殺事件真相究明運動の歴史であり、その過程で提起された真相究明・正義樹立運動の争点を、私の経験を中心に整理したものである」(p10、以下引用は全て書評者による)。この引用からもわかるように本書は、民間人虐殺の真相究明に対する民間の取り組み(1999年～2005年)と、歴史の精算に対する政府の取り組み(2005年12月から4年間)の、両方に関わった当事者である著者による生々しい記録である。著者は、朝鮮戦争期の民間人虐殺と国家暴力問題の研究者であり、2000年に研究成果を韓国で出版した(同書は2008年に日本でも『朝鮮戦争の社会史ー避難・占領・虐殺』として出版されている)。2000年の出版後、著者は、研究者という立場にとどまらず、国家によって殺害された遺族らの苦悩に共感し、「虐殺事件の真相究明と犠牲者の名誉回復」を要求する社会運動を起こしていく。その集大成として書かれた『これは記憶との戦争だ』は、①虐殺事件の真相究明運動がハンナラ党(セヌリ党の旧名)の妨害によっていかに捻じ曲げられてしまったのか、②政府機関である真実和解委員会の限界が、真相の追求にどのような制約を生じさせてしまったのか、③過去の清算において最優先すべきは被害者の救済なのか、あるいは正義の遂行なのか等、活動過程で彼が感じた数多くの争点を整理している。

本書が取り上げている朝鮮戦争前後に起こった民間人虐殺事件は、多くの日本人読者にとって馴染みの薄いものだろう。韓国内で一般的に語られる事件の真相とは、朝鮮戦争において、北朝鮮軍によって多数の韓国民間人が虐殺されたというものであった。しかし本書が指摘するように、これらの民間人虐殺事件は、実際は韓国側の軍人や警察、地域の右翼団体が自国民を虐殺したというのが真相だった。朝鮮戦争の研究者や「韓国戦争遺族会」のホームページによれば、犠牲者の数は最大100万人余りに上り、その多くが戦闘とは無関係に虐殺されたという。本書の内容をより深く理解するために、韓国内でよく知られた虐殺事件について少し触れておく。韓国内で初めて韓国軍による民間人虐殺事件だと判明した

のは、1951年2月9日から2月11日にかけて起こった「居昌事件」である。これはパルチザンを韓国軍が殲滅した事件だと当初考えられていたが、実際は15歳未満の子供385人および女性388人を含む719人の民間人を韓国軍が虐殺したという真相が後年明らかになり、韓国社会に衝撃が走った。しかし本書によれば、悪名高いこの「居昌事件」ですら、数ある虐殺事件の中の一つにすぎない。済州島の4・3事件を始め、麗水・順天の虐殺事件、智異山中心地域で起こった数々の民間人虐殺事件は、いずれも朝鮮戦争以前に起こった韓国軍による虐殺事件であったことが近年徐々に明らかになってきた。また朝鮮戦争勃発直後には、李承晩大統領の命令によって「国民保導連盟」の加盟者や収監中の政治犯、民間人などが大量に虐殺されたこともあった。近年、低予算で映画化され韓国で大ヒットを記録した『チスル』（オ・ミョル監督、2012）は上記の済州島4・3事件を扱っているが、これらの民間人虐殺を取り上げた映画として、それ以外にも、米軍による避難民虐殺事件を描いた2010年の『小さな池』や、朝鮮戦争勃発後に避難できずソウル近辺の人民軍占領地に残っていた民間人が、9・28ソウル奪還後に韓国軍によって虐殺された事件について触れている2004年の『ブラザーフッド』を挙げることができる。

本書によれば、これらの民間人虐殺事件を巡る公的な記憶の裏に存在したのは、共産主義者を殲滅するためにはどのような手段も許されると考える反共主義、およびこの反共主義を自らの政敵抹殺の手段として活用してきた韓国の歴代政権だった。これらの民間人虐殺について言及することは長年にわたってタブー視され、その実態が「アカ」ではない単なる民間人を軍や警察が虐殺した事件だったなどと言うことは、到底不可能だった。罪なき民間人を殺害したのは残虐なアカ（北朝鮮および韓国の左翼勢力）であり、韓国軍が殺害したのは北朝鮮に通じる共産主義者たちだけであったという「神話」が、長らく韓国の公的な記憶を形成し、そこから逸脱する要素は徹底して排除されてきたのである。李承晩政権以降、民間人虐殺を主導した政治勢力は、絶えることなく韓国社会の権力を握りつづけ、自分たちにとって都合の悪い事実を握りつぶしてきた。ところが2004年4月、初めて革新派が大統領および国会の多数派を占める変化が訪れた。革新派の盧武鉉大統領によって「包括的な過去の清算」の必要性が提起され、そのための法案整備が活発になった。しかし野党になったハンナラ党は、過去の公権力による人権侵害、虐殺、残虐行為を明らかにすることに反対して、さまざまな妨害工作をおこなった。国家犯罪の真相究明という問題を左右のイデオロギー対立の問題にすり替え、真実和解委員会の参加資格を制限し、加害者と加害組織を調査する委員会の権限を削減することで、ハンナラ党は過去清算のための基本法の法案を形骸化させた。ハンナラ党によって大きく変質させられてしまったものの、過去清算のための基本法は、紆余曲折を経て、ようやく2005年に法案として成立した。

本書が明らかにするのは、この公的な記憶が排除してきた要素である。北朝鮮軍による韓国民の虐殺は厳として存在した。しかし韓国軍・警察・右翼勢力による自国民虐殺は、北朝鮮軍による韓国民虐殺のそれをはるかに上回る規模だった。これまで強調されてきた「アカの残虐性」とは、軍および警察が自国民を敵国よりも多く殺害したという不都合な真実を覆い隠すための方便だったのである。犠牲者の存在は、戦下という非常事態だったこと、そして反共主義の徹底という名目で隠蔽されてきた。生き残った遺族らも、「アカ」というレッテルを貼られて社会的に抹殺されてしまう恐怖感から、真相を追求できなかった。さらにこのレッテルは、当事者のみならず、連座制によって子孫にまでおよび、彼ら・彼女らは、「アカ」の末裔という汚名に苦しんできた。このような国家による記憶の操作を、本書は「癌細胞」

になぞらえて、国家暴力は全ての国民の「政治・社会意識と道徳的基盤を蝕む」と指摘する。では、どのようにして国家暴力や国家による記憶の操作に対抗すべきなのか？この問題の解決策として本書が強調するのは「国家暴力の被害者たちをいかに被害者として正しく認識して労り社会に復帰させるか、その事実をいかに記憶していくのか」（p8）という問題意識の必要性である。本書によればそれこそが、今を生きる韓国人とその子孫にとって、人間としての尊厳を保って生きるため、そして悲惨な歴史を繰り返さないようにするために、どうしても必要な作業なのである。

なぜ研究者としてではなく、当事者として過去の清算に積極的に取り組むのか。この疑問に対して、著者の金東椿教授は二つ理由を挙げている。まず韓国社会で、これ以上スパイや「アカ」という濡れ衣に苦しむ被害者が生まれないようにしなければならないということ。これに加え、過去の清算は国家を正しく立て直す行為であり、国家の基本原則である正義を樹立するために必要な行為だというのが著者の信念である。著者によれば、1980年光州虐殺、数えきれないほどの拷問致死、原因不明の「事故死」、軍部内の不正、公権力の乱用などのさまざまな国家犯罪の根本にあるのが国家による虐殺事件の隠蔽であり、「民主化以降も柔らかい方法で虐殺は継続されてきた」（p30）のである。

以上が本書の内容である。韓国社会における「記憶」と「歴史」を専門とする評者にとって、本書の指摘する「柔らかい方法による虐殺」および「記憶の捏造」は大変興味深い。確かに「アカとレッテルを貼ることで、政権にとって都合の悪い人物を社会的・政治的に抹殺する」手法は、現在も韓国では日常的に行われているようだ。特にハンナラ党の代表であった朴槿恵が大統領になった今、韓国社会は再び赤狩り旋風が起こりつつある。日本のニュースでも報道されたように、2014年12月19日、韓国では憲法裁判所によって革新系野党である統合進歩党の解散判決が下された。憲法裁判所がこのような異例の判決を下した根拠は、またしても「国家安保や秩序の維持」という、韓国歴代政権が都合の悪い政敵を抹殺するときの決まり文句であった。しかし、その本質が「アカとレッテルを貼ることで、政権にとって都合の悪い人物を社会的・政治的に抹殺する」ことであるということは言うまでもない。

ちなみに、憲法裁判所の判決が出された2014年12月19日は、朴槿恵が大統領に選ばれた2012年12月19日から数えてちょうど2年後のことである。「韓国社会は依然として『一人もアカがいなくてもアカを捏造できる社会』である」（p443）という『これは記憶との戦争だ』の指摘は、単なる憂慮ではなかった。結果的に加害者への処罰なしに終わってしまった「過去の清算」が、負の歴史の連鎖につながっているのである。過去の国家暴力の隠蔽は、今日と明日の不正義と権力乱用の種になるという本書の指摘は、朴槿恵政権下でまさに最悪の形で実現しつつある。